

近代移行期における衣生活についての一考察  
—大分県日田・玖珠地域を中心として—  
大分大教育 村田仁代

目的 本研究ではこれまで研究対象としてきた現代衣生活の基盤である幕末期～明治前期の近代衣生活萌芽期の状況を論及する。封建社会が崩壊し、次の近代社会への移行期であるが、従来、この時期の研究は為政者の発した禁令や文学作品等を通じて論及されることが多かった。そこで本研究では、地域を限定し、文書等から実際の服飾関連品の利用状況を詳細に検討して、当時の服飾に対する人々の価値観の一端を究明する。

方法 大分県日田・玖珠地域を中心に、当地に残存していた触書、買物帳、到来物控帳等から服飾関連の購入品・贈答品等を抽出したのち、個々の形態・利用法等を明らかにする。そしてそれらをもとに当時の衣生活の傾向と特色に関して分析を行なう。

結論 幕末期から明治前期にかけての農村部では都市で販売されているものを積極的に購入しているが、その行為は都市の風俗をすべて模倣しようとしたのではなく、あくまでも伝統的な衣生活を継承させながら、一部に都市文化を盛り込むためのものであった。このことは、結髪具、鼻緒、巾着等の付属の小物が多く購入されていることで解る。また布地に関しては尺単位で多くの端切れを購入しているが、これは当時、自給布の利用が主流となっていたなかで、それらと大きく異なる風合や色彩等の布地を長着でなく、裏地・襟等に利用して一部分にでも身に着きたいという欲求が第一義であったためと考えられる。また祝事に際して端切れを頻繁に贈呈する習慣が見られることから、端切れであっても高価値を持っていたためとも捉えることができる。このように当時の農村社会の衣生活は、都市社会と隔たりのある、伝統的な着装や習俗等を踏襲したものであった。